

## ヨハネによる福音書 1章43～51節

### フィリポとナタナエル、弟子となる（日本聖書協会付記の「小見出し」）

・ 今月の箇所はイエスの公生涯の初め、そのもとに弟子たちを集め始められたときの様子を記したところでは、

・ 登場人物は、イエスと、ここで弟子とされる2人。

① 一人は「フィリポ」

② あと一人は「ナタナエル」です。

・ 「フィリポ」はいわゆる「12弟子」の一人として名前が挙げられており、その人となりや様子を窺い知れる箇所も少なくありません（マタイ 10:3、マルコ 3:18、ルカ 6:14、ヨハネ 1:44～45、6:5～7、12:21～22、14:8～9、使徒 1:13 等）。

＊いわゆる「12弟子」と呼ばれるのは、次の12人です：ペトロ（シモン）、アンデレ、ゼベダイの子ヤコブ、ヨハネ、フィリポ、バルトロマイ、トマス、マタイ、アルファイの子ヤコブ、ヤコブの子ユダ（タダイ）、熱心党のシモン、イスカリオテのユダ。

・ これに対し、「ナタナエル」のほうは記述が限られており、今月の箇所以外では、同じヨハネ福音書の21章2節だけしかありません。しかも、そこに書かれているのは名前と出身地だけ（「ガリラヤのカナ出身のナタナエル」）。ですので、ナタナエルの人となりについて具体的に知ることができるのは実質、今回の箇所だけと言えます。

・ 「ナタナエル」については、12弟子の一人のバルトロマイの本名と見る人もいますが、確かではありません。要するに、ナタナエルはイエスの弟子とはいえ、不明な部分が多く、はたして12弟子に属していたのか、それもよく分からないのが実情です。

・ 問題は、そんなナタナエルなのに、フィリポではなくナタナエルのほうがそこで明らかに「主役」を張っているということです。さらに言うなら、イエスに「見なさい。まことのイスラエル人だ」（47）とまで言わせています。

・ そのような物語だからこそ逆に、そこには何か、私たちの意表を突くような真理が隠されているかもしれない。しかも、それはひょっとすると、イエス・キリストの福音の真理に関わるようなものかもしれないと、そう思われはしないでしょうか。だとしたら、それはいったい、何なのでしょう。

.....

### 全体の流れを 順を追って見てみましょう

イエス、フィリポ、ナタナエルのやり取りは、次のようなかたちで展開していきます。

イエス→フィリポ：「わたしに従いなさい」（43）

フィリポ→ナタナエル：「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ」 (45)

ナタナエル→フィリポ：「ナザレから何か良いものが出るだろうか」 (46)

フィリポ→ナタナエル：「来て、見なさい」 (46)

イエス (→ナタナエル)：「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが<sup>じん</sup>ない」 (47)

・初めに 少し説明を加えるなら、ナタナエルはイエスの父親のヨセフを知っていたと思われます。ヨセフの暮らすナザレはガリラヤの小さく貧しい村で、前述のナタナエルの村・カナと同じ地域にありました (聖書地図等を参照)。ですので、ナタナエルはナザレの様子を見聞きし、その村のヨセフのことも知っていたのでしょう。フィリポはだから、「それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ」 (45) と、わざわざヨセフの名前を出したのだと思われます。

・ところが、です。フィリポの言葉に、ナタナエルは何と言って答えたでしょうか。「ナザレから何か良いものが出るだろうか」 (46) と、けんもほろろに そう答えるのです。つまり、「あんなナザレから救い主が出るなどと、誰が信じられようか」というわけです。

・そこに見られるのは、ナタナエルのどんな思いでしょうか。ナタナエルが考えていた救い主とはいったい、どんな救い主だったのでしょうか。それはイエスの説かれたそれと同じものだったのか、それとも違っていたのか。違っていたとしたら、何がどう違っていたのか。ナタナエルがそこで<sup>とら</sup>われていた思い込みとは いったい、どんなものだったのか。静まって考えてみたいと思います。

・そのようにして、ナタナエルの姿を いわば反面教師として、信仰において心せねばならぬことを学べたらと思います。

・ただし、それもこれも、次のような どこか不思議で、意表を突くようなイエスの言葉を理解したうえでのことと言えるでしょう。なぜなら、そんなナタナエルのことを イエスはなんと、次のように言って称賛されているからです。「見なさい。まことのイスラエル人<sup>じん</sup>だ。この人には偽りが<sup>じん</sup>ない」 (47)

そして、出来事はクライマックスへと向かいます。

イエス (→ナタナエル)：「見なさい。まことのイスラエル人<sup>じん</sup>だ。この人には偽りが<sup>じん</sup>ない」 (47)

ナタナエル→イエス：「どうして わたしを知っておられるのですか」 (48)

イエス→ナタナエル：「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」 (48)

ナタナエル→イエス：「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」(49)

・素直に信じないナタナエルなのに、イエスはなぜ、そんなナタナエルを称賛されたのでしょうか。理解のかぎは イエスの使われた「偽り」という言葉に隠されているように思われます。そして、イエス・キリストの福音の真理もまた、そこにこそ隠されているように思われてなりません。

・47 節で「偽り」となっている語は、英語の聖書では「狡猾さ (guile : RSV) 」とか「だますこと (deceit : NRSV) 」とかいうふうに訳されています。ちなみに、岩波書店刊の通称『岩波訳』も「(あの人には) 裏がない」と訳出しています。

原語のギリシア語 (δόλος, -ου, ό) では、この語は元々「釣りの餌」を意味しました。しかし、釣り師も賢くなります。生き餌に似せた偽物を、すなわち 擬似餌を考え出して、魚を騙して取るようになりました。こうして、時とともに、この語は狡猾賢い 騙しのあれこれを意味するようになっていきました。

・だとしたら、イエスはここで、ナタナエルの何を称賛されたのでしょうか。そして、それをもって、信仰の何を大切するようと この私たちに語りかけておられるのでしょうか。

イエスが称賛されたナタナエルのそれは、称賛に対するナタナエルの応答の仕方からも感じ取れるように思われます。「どうして わたしを知っておられるのですか」(48)

・それにしても、急転直下とも言うべきナタナエルの告白ではないでしょうか。「あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」(48) とイエスに言われるや、ナタナエルは瞬時に「あなたは神の子です」(49) と告白しています。

・いったい何が、このような告白をナタナエルにさせたのでしょうか。イエスの千里眼に驚かされて、でしょうか。それとも、そこにはほかに何か、もっと違った真理が置かれているのでしょうか。もっと深い、もっと豊かな何かが・・・。

・御参考までに、地域的・時代的・人物的背景について触れておきたいと思います。

① ユダヤでは、平和と繁栄の象徴として、イチジクの木を 多くの人が自宅に植えていた。そして、暑さの厳しいとき、大きく成長するその木の木陰を 人々は愛した。

② そうしたイチジクの木陰は、聖書の学びや祈りの場所として広く用いられていた。

③ フィリポはガリラヤの町である「ベトサイダ」の出身であったと、44 節に記されている (聖書地図等を参照)。とすると、同じガリラヤ出身のナタナエルと友人関係にあったと考えられる。

④ 友人同士だったフィリポとナタナエルは 時に、イチジクの木陰で聖書を読み合い、語り合い、祈り合っていたのかもしれない。

⑤ 今回の箇所が、ナタナエルがそのようにして、いつものように 自宅のイチジクの木陰で聖書を読んで黙想していたときのことだとしたら・・・。

イエスとナタナエルの出会いの様がより映像的・具体的に、そして より詳細に立ち上がってきはないでしょうか。ふたりの言葉の意味合いも よりさやかに感じられてくるのでは・・・？ ナタナ

エルの心を打ったのは、はたして何だったのでしょうか。

・そして、これら一連の出来事から知られる恵みの真理とは いったい、何なのか。信仰の想像力を働かせてみたいと思います。

.....

### その他 幾つか

・「見なさい。まことのイスラエル人だ」(47)：<sup>じん</sup>狡さのない <sup>ずる</sup>真実な人の象徴として言われたもので、私たちのあるべき姿を表わしています。

「あなたはイスラエルの王です」(49)：すべての人々の王を意味する象徴的表現で、イエス・キリストは私たちすべての主であることを表わしています。

・「神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる」(51)

「人の子」とは、イエス御自身が御自分の呼び名として用いられた呼称です。そこには、次のようなメッセージが込められていました。「人となって低く生き、私たちの苦しみをその身に負われた。そのようにして人に仕えるその愛の姿の中にこそ、神の独り子としての栄光がある」

「神の天使たちが人の子の上に昇り降りする」というのは、象徴的な表現です。それは、イエス・キリストこそ 天と地を結ぶ架け橋であり、神の事柄を人に示す器であるという意味です。

.....

ナタナエルは はたして、完全な人間だったのでしょうか？

信仰的に出来上がった人間だったのでしょうか？

ナタナエルに開くべき目を開かせたのは いったい、何だったのでしょうか？

イエス・キリストが何より <sup>とうと</sup>尊ばれるのは何でしょうか？

信仰的に生きるとは いったい、どのように生きることなのでしょうか？

信仰的な教会とは はたして、どのような教会を言うのでしょうか？

そして

今月の物語に秘められた最大のメッセージとは はたして、何なのでしょう？